

目次

11 はじめに

12 1 「はじめに」のはじめに

13 2 三代回顧録へのこだわり

16 3 章立てへのこだわり

19 「序」の章 — ケーブルテレビと出逢うまでの時代 —

20 1 昆虫学者への道と挫折

25 2 モラトリアムな高校時代

29 3 壮烈な五月病と脱却

35 4 郵政事業と電気通信行政

① 一年目の挫折

② 二年目の失望

③ 三年目の環境変化

- ④ 火中の栗を拾い始める
- ⑤ 運を使い尽くした役人人生？
- ⑥ やっと実感し始めたノブレスオブリージュ

59 「破」の章 — ケーブルテレビを行政客体として見ていた時代 —

60 1 テレトピアと無利子融資

- ① 地域情報化政策の誕生と背景
- ② ケーブルテレビが重要だと思った理由
- ③ 情報基盤支援のはじまり
- ④ それぞれの地域情報化
- ⑤ 地域情報化政策の挫折と理由
- ⑥ 親孝行の真似？

88 2 新世代ケーブル補助金への道

- ① 情報基盤支援の充実
- ② 最後のぬくもり
- ③ 「情報基盤は手段！」ということへの気づき、その一
- ④ シュトルム・ウント・ドランク（疾風怒涛）
- ⑤ コロナに負けた

3

一層の技術の進展と定着

- ⑥ 再び、政策から離脱
- ⑦ アンチ窓際
- ⑧ いよいよ、有線放送課長！
- ⑨ 有ラって？
- ⑩ 未来不透明なケーブルテレビ
- ⑪ 技術が未来を拓く
- ⑫ 非対称支援のハンディ戦
- ⑬ 盛りだくさんだった有線放送課時代
- ① デジタル・デバイド
- ② ICTベンチャーとの付き合い
- ③ 増税することの大変さ
- ④ ユビキタス
- ⑤ 非公務員型？
- ⑥ 松坂牛
- ⑦ 唐澤さんと西條さん
- ⑧ 带状疱疹
- ⑨ まずは完全地デジ化！
- ⑩ 想定外の油問題

217

「急」の章―当事者としてのケーブルテレビの時代―

- ⑪ 彼岸への羽化不全？
- ⑫ 真面目に制度議論！
- ⑬ クールな日本コンテンツ振興
- ⑭ 4K・8K、エンジン全開！
- ⑮ ラジオを守る
- ⑯ 定年延長?!

218

1 ケーブルテレビの優位性と環境変化

- ① 理事長としての暗い船出
- ② 生残りの道は優位性を活かすこと
- ③ 総合性の発揮
- ④ 機動性の発揮
- ⑤ 地域性の発揮
- ⑥ 技術進歩による環境変化

235

2 四つの意識改革の提言

- ① 「放送から通信へ」の意識改革
- ② 「有線から無線へ」の意識改革

247

3

自身の当事者意識過剰とその弊害への危惧

- ③ 「インフラから上位レイヤーへ」の意識改革
- ④ 「B to C から B to B、B to G へ」の意識改革

① 親離れ、子離れ

② ケーブルテレビとの訣別とコロナ禍

252

おわりに

① 役柄を演じる

② 合理性追求の究極の果て

③ 故郷と私

④ 求め続ける「ICTと昆虫の融合」の道

⑤ 体技心

⑥ 「おわりに」のおわりに

290

略歴

294

主な著書

はじめに

1 「はじめに」のはじめに

今から10年以上前のことである。それまで、思いの丈が募ると、その気持ちを本に込めて出版していたが、公務員時代の仲間の安藤英作さんから「公的意思決定をほとんどにできる立場になったのだから、私的に意志を表示するのではなく公的に政策実行すべきではないか」と飲んだ時にアドバイスを受けた。そして、絶筆した。

しかしながら、もう公的に意志表示する立場でもなくなったし、政策を論じる気も薄らいだ。一方、山を歩いているときなど、前の年に普通にできていたことが辛くなってきたし、脳神経外科の医師からは「MRIに白いところが出始めていますよ」と言われるようになった。そこで、日本ケーブルテレビ連盟理事長という常勤の仕事から離れたこの際、未来を見るのではなく、自分の過去を二度総括してみようという気になった。

私の人生を顧みたとき、「時間、労力を二番目に多く費やしたのが、ケーブルテレビではないか」と思っている。一番目でないだけに、感情的にならずに醒めて対応できたのがケーブルテレビであり、結果として、「我が人生において最も誇れるものとなった」と感じている。そこで、ケーブルテレビに軸を置いた回顧録とすることとした。

未来志向の政策論ではないので、現在奮闘中の経営者や若いケーブルマンの役に立つ即効薬ではない。私と時間を共有したシニアのケーブルマンには、「あの時そうだった」と思い出す端緒にはなるかもしれないが…。独善的な思いの羅列になることは当然のこととご容赦いただきたい。

2 三代回顧録へのこだわり

私は富山県の出身であるが、実家の書棚に『三代回顧録』という本があった。著者は、松村謙三という人だった。

松村家は吉崎家の姻戚にあり、何代も前から相互に娘が行き来していた。祖父が松村謙三さんから聞いた話では、「吉崎家から何人も嫁が来たが、禿頭と酒豪の血は入らなかった」という。換言すると、吉崎家のアイデンティティは「禿頭と酒」ということになるのであろうが、自身を含め前後の代々を見ると「むべなるかな」という感はある。

私の先祖は、宝暦3（1753）年に、「蓮如の里」として有名な越前の吉崎御坊から、越中の福光（富山県南砺市福光）へ来たという。江戸中期の初代が現在の居住地を決めた理由

は、「氾濫の多い小矢部川が近くにありますが、残っている室町時代以降の文獻記録によれば、この場所が水に浸かったことはない」というものである。私の理屈っぽい性格は先祖伝来のものかもしれない。

幼児のころから饒舌で理屈っぽい性格であつたようである。例えば3歳の頃、よく遊んでもらう近所の年長者が学校

に行つて不在の時に訪問したところ、家の人に「○○ちゃんは学校。また来てね」と断られた。しかし、家の人相手にひとしきり話した後、翌日は「こんにちは！○○ちゃん学校でいないけど来ました」と言つて訪問し、また世間話をしていたそうである。

長命の血統なのか、長生きする長男が連綿と続き、私で九代目である。吉崎御坊から先祖が来た理由は定かではないが、吉崎屋と称して商業を営んでおり、父までの直近四代は郵便局長であつた。第二次世界大戦以降は制度的に専業の郵便局長になつたが、それ以前は兼業だつたそうである。



3歳の頃

先に登場した松村謙三さんの東京・鷺ノ宮のお宅に寄宿しながら早稲田大学理工学部電気科を卒業した父であるが、長男ということで富山に戻り、福光郵便局長になった。子供の頃、我が家の二階は郵便局の窓口と事務室、二階は電話交換業務と局長室であった。「お父さんの働いている姿を絵に!」という小学校の宿題は難問であった。郵便屋さんの仕事はイメージできるが、郵便局長が何をする仕事かわからない。机に向かって書類にハンコを押している父の姿を無理して描いた記憶がある。

後に、自分が郵便局長になるとは露ほども思わないまま……。

親戚を見ると、父方には先に触れた松村謙三さんがいた。この人は、民政党（現在の自由民主党）の国会議員で、戦後、革新官僚と共に、農林大臣として農業改革、文部大臣として文教改革を行った人である。地元では神様のように思われており、祖父にとっても例外ではなかった。小学生の頃、その松村謙三さんが勲一等旭日大綬章を受章された。祖父に「その勲章より上は何? それをもらうように頑張る」と言ったときの祖父の複雑な顔は今も記憶に残る。「神様とと思っている人の上を目指そう」と、孫が言ったのだから……。

その松村謙三さんの著作が、明治・大正・昭和の三代にわたる自身の回顧録である「三代回顧録」である。本書のタイトルにこだわるのは以上のような経緯によるものである。もっと

も、子供の頃は、「祖父・父・自分の三代にわたる回顧録」と誤解していたのではあるが…。

母方の祖父は高岡市で弁護士をしていたが、その従兄弟に大橋八郎という人がいた。昭和20年代、通信省事務次官、電電公社総裁、NHK会長を歴任した。子供のころにはそんな意識は全くなかったが、結果論として「血だった」と言われる人生になってしまった。

3 章立てへのこだわり

「序破急」。あまり聞きなれない言葉を章立てに用いることとした。

そもそも、序破急とは、本来は雅楽の曲を構成する三つの部分をいう。無拍子の低速度で展開されるのが「序」、「破」から拍子が加わり、「急」で加速が入る三部で構成される演奏形式で、西洋音楽の楽章に相当するものと考えることができる。また、起承転結は四段であるが、序破急は三段である。このような考え方は、本家の雅楽よりも能楽においてポピュラーとなり、世阿弥は芸道一般に通じるものとし、これが現代演劇の三幕構成につながっている。

耳慣れない「序破急」という言葉を章立てに用いたのは、自分の人生がケーブルテレビをテーマにした三幕の演劇のように思えたからである。

「序」は導入部分であり、ケーブルテレビとはあまり関係がない。しかしながら、今ある物事には全て理由がある。私がケーブルテレビと生きるようになった要因の内で大きなものを取り上げた。これらのことを経なければ、私はケーブルテレビに出会うことはなかったであろう。

「破」は展開部分である。「目覚め」から「発火」の時期である。「総論としてのケーブル」「行政客体としてのケーブル」の時代である。世の中には「自分の好みでケーブルに肩入れしたやつだ」と思っている人がいるかもしれないが、少なくとも公務員時代には、ケーブルテレビが好きで応援していたのではない。ケーブルテレビを支援することで、広い意味での電気通信分野が引き締まり、活性化すると思ったから政策支援したのである。唐澤俊二郎元郵政大臣が日本ケーブルテレビ連盟理事長時代のころ、「NTTやNHKや民放がしっかりするための健全野党になるようにバックアップするのです」と申し上げたことがある。「与党になることはないの?」と聞かれたが、「残念ですが、現在のところは『諸派』です。未来はわかりませんが…」と、答えた。

「急」は完全燃焼である。ケーブルテレビは、社により地域により規模により千差万別である。それぞれに、なるべく各論的に、具体的に向き合った時代である。「ケーブルテレビが自

分」というように、気持ちとしてはケーブルテレビに埋没した時代である。「私物化」という批判がそのうち出るのを覚悟で取り組み、そして自分の中に老醜を感じはじめた時に早めに退いた。自覚症状は、「ケーブルテレビが本当に好きになってしまったこと」「自分とケーブルテレビとの間にあった垣根が崩れてきたこと」である。

この本は、政策論ではないし、現実のケーブル経営者に役立つものでもない。独善的な思いや不確かな記憶の羅列であるので、不愉快に思われる可能性は高い。事実と異なるところがあるかもしれない。その時は、そこで本を閉じていただきたい。

「吉崎はあの時こんなことを思っていたのか」という気持ちで、一つのフィクションとして、しばしお付き合いいただければ幸いである。